記者発表資料

平成２６年１１月２９日
津軽ダム工事事務所

東北地方ダム管理フォローアップ委員会
第1回　津軽ダムモニタリング委員会　審議結果について

津軽ダムでは、平成２７年度の冬に試験湛水を予定しており、試験湛水に先立ち、管理移行後の洪水調節、環境への影響等の調査及び調査結果の分析を一層客観的、科学的に行い、津軽ダムの適切な管理に資することを目的として、学識経験者で構成される「東北地方ダム管理フォローアップ委員会　津軽ダムモニタリング委員会」を平成２６年１１月２９日に設立しました。

今回の第１回委員会では、今後のモニタリング調査計画や前回の環境検討委員会（平成２５年１２月５日）以降に実施しましたモニタリング調査の結果について、審議しました。

■開催日時：平成２６年１１月２９日（土）１４：００～１６：００

■場　　所：弘前文化センター第２会議室

■出 席 者：別紙のとおり

〈発表記者会：弘前市記者会、専門記者会〉

【問い合わせ先】
国土交通省　東北地方整備局　津軽ダム工事事務所
電話　0172-85-3031　FAX 0172-85-3008

調査設計課長　遠藤（えんどう）　俊彦（としひこ）（内線351）
専門職　木村（きむら）　清隆（きよたか）（内線350）

東北地方ダム管理フォローアップ委員会
津軽ダムモニタリング委員会　委員名簿

氏　　名	所　　属	役　職	専　　門	備　　考
東　信行	弘前大学	准教授	魚類、河川生態	
海田輝之	岩手大学	教　授	水環境(水温、水質)	
大高明史	弘前大学	教　授	底生動物	欠　席
小笠原暠	秋田大学	名誉教授	鳥類、哺乳類、両生類、爬虫類	欠　席
工藤　忠	日本チョウ類保全協会	理　事	昆虫類	
佐々木　誠	秋田県立二ツ井高等学校	教　諭	哺乳類(コウモリ類)	
原田幸雄	弘前大学	名誉教授	植物、付着藻類	委員長
檜垣大助	弘前大学	教　授	地形・地質	
由井　正敏	東北鳥類研究所	所　長	猛禽類、鳥類	

※五十音順

第１回 津軽ダムモニタリング委員会の審議結果（要旨）

１．モニタリング調査計画

・津軽ダムでは「ダム等の管理に係るフォローアップ制度」に基づき、試験湛水及びダム運用による環境変化を把握することを目的として、モニタリング調査を実施する予定である。
・本委員会では、今後５年間程度実施する予定の「モニタリング調査計画」について審議を行った。

【審議結果】

・今後のモニタリング調査計画については、了承された。
・水質調査についてはダム湖内、下流河川の調査地点の追加を検討する。
・ダム湖流入河川の魚類の産卵場調査を検討する。
・ダム湖周辺の環境情報図の作成が必要である。
・ダム湖の利用実態についてできるだけデータを収集する。

２．今年度の取り組み状況について

（１）大気環境（粉じん等、騒音、振動）・水環境（土砂による水の濁り）

・粉じん等・騒音・振動・土砂による水の濁りについては、概ね基準値を下回っていた。

【審議結果】

・津軽ダム建設工事に伴う影響はほとんど無いと考えられる。また、工事は収束に向かっているが、今後も調査を継続実施する必要がある。

（２）動物

〇ユビナガコウモリ

・目屋ダムの仮排水路トンネルに生息していたユビナガコウモリは、平成２１年１月に人工の生息施設（コウモリボックス）へ全頭移転した。
・ユビナガコウモリは、移転直後の冬眠期はコウモリボックスへ一時的に定着したものの、その後は、あまり定着していない状況となっていた。
・このため、平成２２年１０月にボックス内へ遮光板等を設置し、生息環境の改善を行った。その結果、翌年以降、再定着が確認され、利用個体数が増加した。
・平成２５年の調査では、本種がコウモリボックスを通年利用していることが初めて確認された。
・平成２６年１０月の調査では、利用個体数は、昨年の同時期より大きく増加した。

【審議結果】

・本種の利用個体数が増加傾向であることから、ユビナガコウモリの保全措置について、一定の効果があったと考えられる。さらに定着するまでには、ある程度の期間が必要と考えられることから、今後も引き続き生息状況を見守る必要がある。

〇森林性コウモリ

・昨年に引き続き、これまでに確認されている重要な森林性コウモリ類について、生息状況の現況把握を行った。
・その結果、本年も森林性コウモリ類の生息が確認されたことから、これらの種の生息可能な環境が津軽ダム周辺で維持されているものと考えられた。

【審議結果】

・今後は、試験湛水以降も生息状況を把握する調査が必要である。

〇湿地環境モニタリング調査

・試行的に造成した湿地等について、保全対象種を始めとする水生動物の生息状況や、植物、植生の状況について現況把握を行った。
・その結果、保全対象種であるエゾゲンゴロウモドキやヒメアカネの生息が初めて確認された他、多様な動植物の生息・生育が確認された。

※湿地ビオトープワークショップの活動報告

・多様な動植物の生息環境として保全・整備を進める「湿地環境」において、自然環境に関心の高い地域の方々から成る「津軽白神湖ビオトープ ワークショップ」を行った。
・ワークショップでは、試行的に造成した湿地を活用しながら利活用について検討を進めた。また、ワークショップが主体となり、地元の小学生を対象に「自然観察会を初めて開催した。
・今後は、将来の湿地環境の利活用・維持管理等を担う組織づくりを目指す。

【審議結果】

・今後も、湿地環境を保全するため、維持管理面も配慮し、調査検討をさらに進めていく必要がある。

（３）植物

〇移植植物

・直接改変を受ける重要な植物：１１種（ミクリ、ノダイオウ、ミチノクサイシン、サルメンエビネ、テイネニガクサ、エゾノリュウキンカ、ヤマシャクヤク、オオアカバナ、オオユリワサビ、ミチノクホタルイ、ミチノクナシ）について、平成１９～２５年に移植した。
・平成２６年の生育状況調査では、ミチノクサイシン、エゾノリュウキンカの移植地の内、各１箇所において生育不良が確認されたため、生育適地へ再移植を行った。
・その他の種の生育状況は、概ね良好であった。

【審議結果】

・今後も、生育状況をモニタリングしながら、適切な対応を行う必要がある。

〇監視植物

・直接改変以外の影響を受ける可能性がある重要な植物：９種（フジカンゾウ、ノダイオウ、ミチノクサイシン、サルメンエビネ、テイネニガクサ、ヤマシャクヤク、オオユリワサビ、ハイハマボッス、ミチノクナシ）について、生育状況の監視を行った。
・平成２６年の生育状況調査では、サルメンエビネの生育地の内、１箇所において生育不良が確認されたため、生育適地へ移植を行った。
・その他の種の生育状況は、概ね良好であった。

【審議結果】

・今後も、生育状況をモニタリングしながら、適切な対応を行う必要がある。

〇特定外来生物の駆除

・昨年に引き続き、特定外来生物（オオキンケイギク・オオハンゴンソウ）について、分布拡大を防止するために、可能な限り駆除を行った。
・オオキンケイギクは、確認地点数・株数が少ない傾向が続いているが、オオハンゴンソウは分布を拡大している可能性がある。

【審議結果】

・今後も、モニタリングしながら駆除を継続する必要がある。

（４）生態系　上位性（猛禽類）

・平成２６年シーズンにおける、津軽ダム周辺に生息する猛禽類の生息状況の概要、工事での期間調整やコンディショニングによる環境保全措置の実施状況の概要について報告した。

【審議結果】

・詳細については、猛禽類検討委員会での審議に委ねることとする。



事務所長挨拶



委員長挨拶



討議状況